

誤答の重みづけに関する比較調査研究

山口大学 深 沢 清 治

1. はじめに

外国語学習上の誤りが母国語からの干渉のみに起因するものではないことから対照分析の予測力が疑問視され、代って誤りの原因究明を中心課題とする誤答分析研究が抬頭してから15年以上が経過した。当初の誤答分析は誤りの頻度、種類、原因を調査し、それにより学習者の第2言語習得過程を解明しようとしたのに対し、近年の誤答分析の中心は、個々の誤りが持つ伝達上の効果の解明へと移行し、新たな展開を呈している。

そこで、本論はまず、誤答の評価に関わる諸研究を概観し、さらに、ある誤答データに対するアメリカ人大学教師と日本人大学生の評価を比較調査した結果を報告し、外国語としての英語教育に対する誤答評価研究からの示唆について考察することを目的とする。

2. 誤答分析研究の近年の動向

(1) 誤答分析から誤答評価へ

誤答分析は、誤答の種類や原因の解明により教える側の誤答観を広げると同時に、教育的応用にも大きな可能性を持っていた。そのうち最も実践との関わりが深いのは誤答訂正であろう。特に優先的に訂正すべき誤りとして Hendrickson (1978) は、(i) 伝達の障害となる誤り、(ii) 相手に不快感を与える誤り、(iii) 出現頻度の高い誤り、の3つを挙げている。そして、誤答の訂正順位決定に際して、従来型の文法的正確さや出現頻度という尺度だけでなく、誤りの持つ伝達上の効果という判断基準がとり入れられるようになった。その始まりは Burt and Kiparsky (1972,1974) に見られる global error (全体的誤り) と local error (局部的誤り) の区分である。前者は、文の全体的構造や文と文のつながりに関わり、内容理解に著しく障害を与える誤りで、後者のように全体的内容理解にはほとんど支障とならない誤りよりも優先的に訂正されるべきものとされている。これにより、個々の誤りの重要度には差があることが指摘されたのである。

このように誤りの重みづけを行なう誤答評価の研究は、1980年前後から次々と発表されている。これまでの誤答分析が教師個人の判断によるものが多かったのに対して、誤答評価は多数の経験者の判断をもとにしており、目標言語を母国語としない教師の直観的判断ではどうしようもない側面である。また、従来の誤答分析が「どこが誤りか」をことさらとりあげた accuracy 重視の立場とすれば、誤答評価は「相手にどこまで通じるか」という伝達上の intelligibility あるいは acceptability を中心にした立場と言えるであろう。

(2) 誤答評価の研究手法

誤答評価研究の特徴は、誤りの重要度の判断基準を目標言語の母国語話者の持つ言語的直感に求めたことである。しかも、各々の母国語話者の判断には、年齢、性別、社会階層、教育背景などで違いがあると考え、一般に数十から数百人の母国語話者の総合的判断を集めて客観性を持たせようとしている。

研究方法の手順は、どの研究もほぼ次図1のようなものである。まず誤答データを集積し、その中から経験的に、外国人学習者に共通する誤りを抽出する。そして、その誤りを、外国人学習者の発話のまま、あるいは教師が一般的と思う誤りを含めて作った例文で、母国語話者に提示するのである。被験者は、提示された誤答データについて理解可能性 (comprehensibility) あるいは誤りから生じる不快感 (irritation) という2つの尺度からの許容度 (tolerance) を一般に1 (最も許容できない) から5 (最も許容できる) の5段階で評定し、誤答訂正上の優先順位を決定するのである。また、近年の誤答評価研究は、母国語話者と非母国語話者、さらに言語教師とそうでない者、との間の判断を比較したのも見られ、研究方法は評価する者によって図2に示すような4つの区分が考えられる。

図1 誤答評価の研究方法

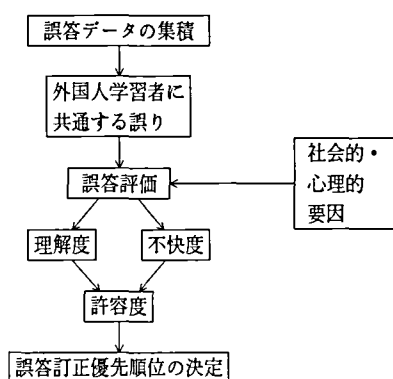
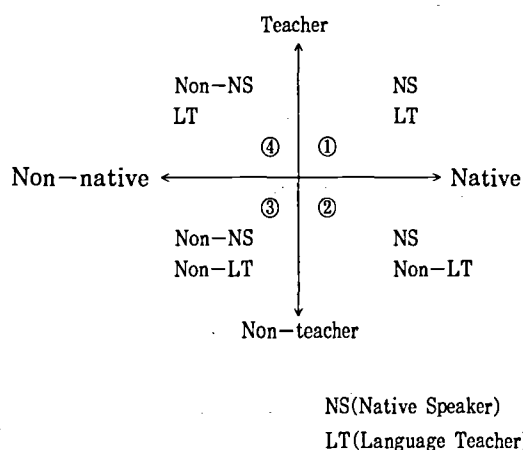


図2 誤答評価者の区分



現在までは、図2のカテゴリーのうち、①あるいは②のグループに属する人々を評定者とした研究が多かったが、最近ではこれら2つのグループの判断を、非母国語話者の外国語教師である④のグループの判断と比較した研究も発表されている。

(3) 誤答評価の研究結果

これまで誤答評価の諸研究は、さまざまな対象言語 (主として英語, スペイン語, フランス語, ドイツ語), 調査項目 (発音, 文法, 意味), 提示モード (spoken / written), の角度から少なくとも15件が行なわれてきた。"そのうち、調査材料については、研究手順の簡便さのためか文法上の誤りを対象とした研究が最も多い。

これまでの研究の結果、評価者が母国語話者かそうでないかによって、一般的に次のような相違点が指摘されている。まず母国語話者は、誤りを含む文全体の意味、メッセージを中心に考え、intelligibility を重視する。発音の誤りは著しい場合には不快感を生じることもあるがあまり大きな障害とはならない。また、評価者の年齢が上がるにつれてより厳格に、そして理系よりも文系の教師の方が誤りに寛容とする報告もある [Vann et al. 1984]。これに対して、非母国語話者の教師は、形式面、特に文法的正確さを重視し、基礎的事項の誤りには特に厳格である。また、評価は母国語話者よりも一般に厳しく、特に反応が遅い場合には性急に判定してしまうと言われている。

3. アメリカ人大学教師と日本人大学生との文法エラーに対する重みづけ比較調査

それでは、母国語話者と、上図2の③のカテゴリーに属する日本人大学生とは、同一の誤りに対して、それぞれどのように反応するのであろうか。そこで、Vann *et al.* (1984) の研究を土台として、両者の反応の比較調査を実施した。

1) 被験者

アイオワ州立大学教官164人 (Vann *et al.* 1984)

山口大学3年生47名 (本調査)

2) 調査材料

Vann *et al.* (1984) で使用された12種類の文法エラーを含む文 (表1)

3) 調査方法

文法エラーを含む文に対する許容度を1 (least tolerable) から5 (most tolerable) までの5段階で評価させ、その平均で各項目の順位決定を行なう。

4) 結果と考察

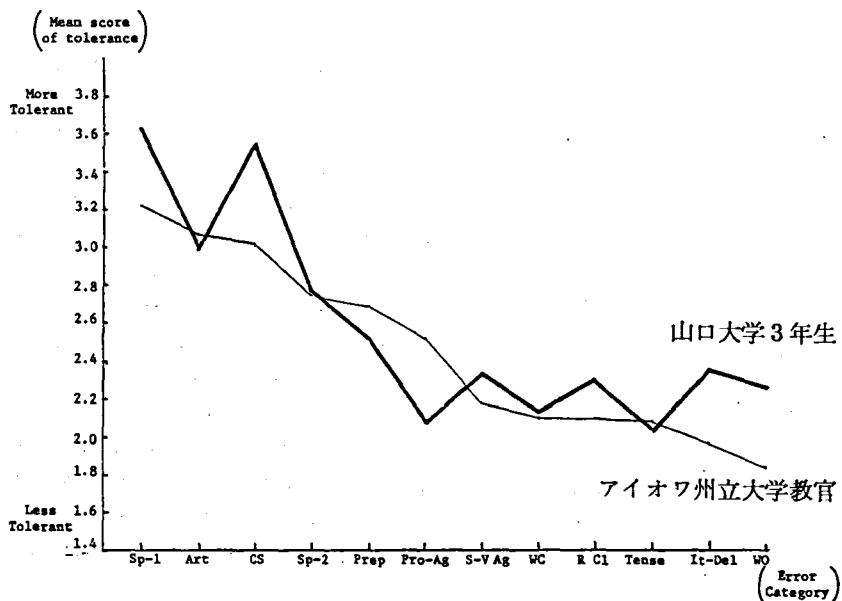
調査材料の各項目に対する許容度の5段階評価による平均値、および標準偏差は表1に示す通りである。誤答のカテゴリーは Vann *et al.* (1984) の調査による容認度の高いものから順に並べられている。また、2つの調査結果をグラフ化して相対的に示したのが表2である。

表1 Rank Order of Gravity and Errors listed in Order of Increasing Seriousness

Error Category	Vann <i>et al.</i> (1984) The present study		
	Mean score of tolerance (S D)	Mean score of tolerance (S D)	
1. Spelling-1	3.22 (0.96)	3.62 (1.12)	1. These <i>Programmes</i> are not acceptable. 2. One example of osmosis is when the water goes <i>thru</i> the soil to the roots of the plants and from there to the leaves.
2. Articles	3.07 (0.98)	3.00 (1.29)	1. When two metals are combined, the new product is called _____ alloy. 2. At certain times of <i>a</i> year, geese are plentiful in Iowa.
3. Comma Splice	3.02 (0.95)	3.55 (0.99)	1. The current was swift ____ he was unable to swim. 2. The official television in Venezuela is like Channel 11 in Iowa ____ it has a lot of cultural and educational programming.
4. Spelling-2	2.75 (1.05)	2.77 (1.86)	1. Osmosis is the process by <i>wich</i> a weak solution diffuses through a semipermeable membrane to a stronger solution. 2. They learned a <i>valueable</i> lesson.
5. Prepositions	2.69 (0.96)	2.51 (0.99)	1. Inorganic acids are obtained <i>in</i> nonorganic matter. 2. An example <i>for</i> this process is when water goes into the plant' s roots from the soil.

6. Pronoun Agreement	2.52 (0.96)	2.09 (0.99)	1. <i>Each</i> of us should say what <i>they</i> believe. 2. When <i>one</i> cannot swim, <i>you</i> fear the water.
7. Subject-Verb	2.18 (0.98)	2.34 (1.10)	1. The article is about an <i>experiment</i> that <i>try</i> to explain how osmosis happens. 2. <i>Osmosis</i> are the process in which water passes across a semi-permeable membrane.
8. Word Choice	2.10 (0.87)	2.13 (1.06)	1. Acids are <i>qualified</i> into two big groups. 2. The Nobel Prize winner this year was <i>interesting</i> in this subject.
9. Relative Clauses	2.10 (0.91)	2.30 (1.07)	1. In his free time he wrote his autobiography which he did not finish <i>it</i> . 2. Acids are divided into two groups: those that always contain the element carbon <i>whose</i> can be found in growing things and those that do not contain the element carbon.
10. Tense	2.09 (0.86)	2.04 (0.97)	1. Citric acid that is <i>founded</i> in lemons and oranges is an organic acid. 2. We have <i>made distinguished</i> two kinds of metals.
11. <i>It</i> -Deletion	1.96 (0.92)	2.36 (1.26)	1. ____ is necessary that a reservoir is higher than the town. 2. When we combine zinc with copper ____ is called an alloy.
12. Word Order	1.84 (0.75)	2.26 (1.06)	1. <i>Not only it</i> allows people to travel cheaply, but to enjoy themselves as well. 2. <i>Stops happening the process</i> when concentrations on both sides are equal.

表2 誤りの重みづけ相対表



2つの調査結果には、類似点と相違点が見られる。まず、これまでの誤答評価の諸研究から、仮説として日本人大学生はすべての文法エラーに対して厳格な評価を行なうと予想されたが、実際には個々の誤りに対して異なった重みづけをすることがわかった。また、12のカテゴリーによる誤りの容認度順位においても、母国語話者による判断と高い相関（スピーアマンの順位相関0.78）が得られた。このような結果が得られた原因のひとつとして、調査対象の大学生が3年次の英語科教育法を受講中であったことが考えられる。少なくとも知識としては、誤答の重みづけに差があることを理解していたものと思われる。

これに対して、個々の誤りに対する評価については、両グループの反応に差が見られる。まず、日本人大学生の方が、（イギリス式）スペリング、コンマ欠落、it-脱落、語順について、より許容できるとし、また、前置詞、代名詞の一致、については、より厳しく評価しているのがわかる。これらの誤りを前述の global/local error に区分すれば、日本人大学生は、It-脱落、語順のような全体の内容理解に関わる誤りを容認し、逆に、前置詞、代名詞の一致、といった部分的要素の local error を重視することがうかがわれる。これらの結果は、被験者が受けてきた英語授業において、形式面での誤りが重視されていたことを反映するものであろう。このような限定されたデータではあるが、誤りに対する反応は、母国語話者と非母国語話者の間でわずかながら差のあることが追認されたと言えよう。

4. おわりに

これまでに述べた誤答評価の研究成果を、今後どのように生かしていけばよいのだろうか。まず第1には、主として母国語話者の反応から、教える側の誤答観に新たな質的側面を加えることであろう。これまで、外国語としての英語学習者は、正確な言語使用を最優先することが多かったが、母国語話者は、相手に対する文化的、民族的偏見を除けば、全体としての内容理解につとめ、正確さだけを問題にすることはないという [Ludwig 1982: 282]。第2に、この成果は、英語学習上の誤答訂正に最も関係が深いと思われる。コミュニケーションが重視される中で、global error を中心に、通じることを優先した誤答訂正を行なうことができよう。当然、その場合、理解・運用のいずれのレベルを求めるといふ到達目標、あるいは授業における練習目標、など教授上の視点からの異なった対応も必要であろう。学習者の誤りに対する、一元的評価からの脱皮を図らねばならない。

今後の課題は、誤答評価の調査方法に残されている。多くの研究が、文レベルにおける文法上の誤りに集中しており、意味や談話のレベルにも進める必要がある。また、調査は一般に、1文レベルの、しかも1文あたり1つの誤りを含む例文を対象としているが、コンテキストの有無による反応の差も考えなければならない。さらに、このようなデータを蓄積する一方で、日本人英語の特徴を広く示すことにより理解度を高める努力も必要であろう。

〔注〕

1) 誤答評価の諸研究については、Ludwig (1982), Vann *et al.* (1984), 深沢 (1982) などにまとめられている。

〔参考文献〕

Burt, M. and C. Kiparsky (1972), *The Gooficon: A Repair Manual for English*. Newbury House Publishers, Inc.

- (1974) , "Global and Local Mistakes," J. C. Schumann and N. Stenson(eds.)*New Frontiers in Second Language Learning*. Newbury House Publishers, Inc. 71-80.
- Hendrickson, J. (1978) , "Error Correction in Foreign Language Teaching : Recent Theory, Research, and Practice," *MLJ*, 62, 8, 387-398.
- Johansson, S. (1975) , *Papers in Contrastive Linguistics and Language Testing*. CWK Gleerup.
- Ludwig, J. (1982) , "Native-Speaker Judgments of Second-Language Learners' Efforts at Communication : A Review," *MLJ*, 66, 3, 274-283.
- Vann, R. *et al.* (1984) , "Error Gravity : A Study of Faculty Opinions of ESL Errors," *TESOL Q*, 18, 3, 427-440.
- 深沢清治 (1982) 「外国語学習における誤りの評価-誤りの重要度に関する近年の研究から-」
『広島大学教育学部紀要』, 第2部, 第31号, 49-56.
- 垣田直巳 (監), 小條敏明 (編) (1983) 『英語の誤答分析』 大修館書店